

地名から見た集落の空間認識に関する研究

立命館大学大学院* 学生員 田原秀雄
立命館大学理工学部** 正会員 笹谷康之

1. 研究の目的と背景

1998 年の 12 月に農林水産省は、都市近郊に立地する農村集落の今後の農業基盤整備事業として『田園空間博物館構想』の創設を明らかにした。これによると、今後の農村集落は単なる生産の場としてだけではなく、多面的な機能の発揮による都市との新しい関係性が求められており、中でもその景観の重要性が問われている。そこで本研究では、農村集落の特徴を解明することを目的として、集落内部に存在する地名を用いて、①集落の地名の語彙を類型化し、その語構成を解明することで、命名の語源となった環境条件の解読を行う。②山麓集落内部の地形の分節化と類型化を行い、小字の語彙と地形や土地利用形態との関連性を明らかにする。

2. 研究の手法と調査対象集落の概要

本研究で用いる地名は、人々の生活と最も密着した微細な地名である小字と通称地名をテキストとして用いる。地名の収集は、通称地名は現地での聴き取り調査による収集を、また小字は絵図や地籍図を主な資料として用い、補助的に聴き取り調査を行うことによって収集した。現地調査に要した述べ日数は、約 60 日間である。表 2-1 は、本研究で用いる各地名数である。

表 2-1 地名サンプル数

	小字数	通称地名数
山麓集落	92	397
湖岸集落	264	—

調査対象集落は、滋賀県草津市から栗東町の丘陵地の山麓に位置する 6 集落と、同草津市の平野部の琵琶湖湖岸に位置する 4 集落である。この山麓の集落は古代寺院の荘園から発した例が多く、また湖岸の集落では 8 世紀中頃以来の方状の条里プランが広く分布しており、ともに古代由来の地名が数多く残されている地域である。

3. 地名を構成する語彙素

本研究では、地名を構成する語彙の最小の単位を『語彙素』、また語彙素の総体を『語彙』と定め分析を行う。そこで、まず山麓集落の通称地名の語彙素分析を行うことにより、地名の語彙素を表 3-1 の 27 のカテゴリーに分類することができた。

表 3-1 語彙素のカテゴリー

大分類	小分類	大分類	小分類	大分類	小分類
機能語彙	施設	社会語彙	利権	生物語彙	植生
	住居		領地境界		動物
	生産		城館屋敷		規模
	道具		職業身分		状態
	交通		風習行為		相貌
意識語彙	忌地	地理語彙	水系	分別語彙	新旧
	信仰		地形		地名
歴史語彙	伝説伝承		地質		位置
	遺跡	気候語彙	日照		場所区画

そして小字の語彙素分析を行った結果、山麓の集落では「地形」語彙に「位置」語彙を接続し、湖岸の集落では『坪』『海道』『出』といった「場所区画」語彙に「位置」語彙を接続するこ

表 3-2 小字の語彙素分析 (山麓)

分類	合計	語彙素構成	単純	語頭	語央	語尾
位置	24.26%	0.00%	14.20%	0.59%	9.47%	
忌地	1.18%	0.00%	1.18%	0.00%	0.00%	
規模	8.28%	0.00%	8.28%	0.00%	0.00%	
交通	1.18%	0.00%	0.00%	0.00%	1.18%	
住居	1.18%	0.00%	0.59%	0.00%	0.59%	
城館屋敷	1.18%	0.00%	0.00%	0.00%	1.18%	
状態	1.18%	0.00%	1.18%	0.00%	0.00%	
職業身分	0.59%	0.00%	0.59%	0.00%	0.00%	
植生	2.37%	0.00%	1.78%	0.00%	0.59%	
新旧	1.78%	0.00%	1.78%	0.00%	0.00%	
信仰	5.33%	3.55%	1.78%	0.00%	0.00%	
水系	2.96%	0.00%	1.18%	0.00%	1.78%	
生産	7.10%	0.00%	0.00%	0.00%	7.10%	
地形	33.14%	4.14%	8.88%	1.18%	18.93%	
地質	2.96%	0.00%	2.37%	0.00%	0.59%	
動物	0.59%	0.00%	0.59%	0.00%	0.00%	
場所区画	4.73%	0.00%	0.59%	0.00%	4.14%	
総計	100.00%	7.69%	44.97%	1.78%	45.56%	

表 3-3 小字の語彙素分析 (湖岸)

分類	合計	語彙素構成	単純	語頭	語央	語尾
位置	27.51%	0.59%	14.50%	1.48%	10.95%	
規模	4.14%	0.00%	2.96%	0.59%	0.59%	
交通	0.59%	0.00%	0.00%	0.00%	0.59%	
施設	0.30%	0.00%	0.30%	0.00%	0.00%	
住居	4.44%	0.89%	0.89%	0.00%	2.66%	
城館屋敷	0.30%	0.00%	0.30%	0.00%	0.00%	
状態	1.48%	0.30%	1.18%	0.00%	0.00%	
職業身分	0.59%	0.00%	0.30%	0.00%	0.30%	
植生	4.14%	0.89%	2.37%	0.00%	0.89%	
新旧	2.37%	0.00%	2.37%	0.00%	0.00%	
信仰	4.73%	1.48%	2.66%	0.00%	0.59%	
水系	4.73%	0.30%	2.37%	1.48%	0.59%	
生産	8.88%	0.30%	0.59%	0.00%	7.99%	
地形	9.76%	2.66%	2.37%	0.00%	4.73%	
地質	1.18%	0.00%	1.18%	0.00%	0.00%	
動物	0.89%	0.00%	0.89%	0.00%	0.00%	
場所区画	23.37%	12.72%	0.00%	0.59%	10.06%	
利権	0.59%	0.00%	0.30%	0.30%	0.00%	
総計	100.00%	20.12%	35.50%	4.44%	39.94%	

とで、小字の命名が行われていた傾向が明らかになった。また山麓集落では上記の 2 項目が極めて突出した値を示すが、湖岸の集落では比較

キーワード：小字、通称地名、空間認識、地形、命名の由来

連絡先：*〒520-0831 滋賀県大津市松原町 12-9-403 Tel077-537-7069

**〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1 Tel077-565-1111

的各語彙素の出現率の差が小さい。つまりこのことから、地形の変化が乏しい湖岸集落では、環境を表す多様な語彙を小字に用いることで、場所の弁別を行っていたということが明らかになった。

4. 山麓集落における小字の命名

本章では、山麓集落の小字の地形を 5 タイプに分類し、その内部の通称地名や土地利用形態と、小字の命名の由来とを比較する。そしてこれによって、各地形タイプごとの小字名の傾向を明らかにする。命名の由来は、前章の語彙素分析の結果を用いる。また、地形タイプは図 5-1 と表 5-1 にある 5 つのタイプ、土地利用形態の分類⁽¹⁾は表 4-2 のように行う。

(1) タイラ

ここでは 9/34 の割合で土地利用形態と小字名が一致している。また、こ



図 4-2 タイラ

の地形タイプでは、小字の命名の由来として多様な語彙が選択されていたことも分かった。

(2) ヒラ

小字数は 7、通称地名数は 28 である。ここでは、命名の由来が「地形」に分類される 5 例中、『土地ヶ平』『平ヶ谷』『南ヶ平』の 3 例においてヒラの地形が小字名に関係していた。つまり 3/7 の割合で、小字名としてこのヒラ地形が選択されていたことが分かった。

(3) ヤマネ

この地形タイプにおいても前述のタイラと同様に、図 4-4 に見られる平地部における土地利用形態が、8/21 の割合で小字の命名の由来となっていたことが明らかになった。

(4) ハナ

この地形タイプでは、小字の事例数が 4 例と非常に少ないが、しかし『岡花』『高平』『小丸』『長尾』と、全てにおいてこのハナ地形の形状が小字名に関与していたことが分かった。

(5) タニ

小字数は 26、通称地名数は 123 である。この地形タイプでは、小字の命名根拠として「地形」が極めて多く選択されていた。そして、その「地形」の中でも『～谷』の小字名が 14 例存在し、また『釜』『釜岡』『石蔵』と、タニ地形の特殊な形状や状態を表現する他の語彙を用いた小字が存在していたことから、この地形の認識度の高さが伺われる。

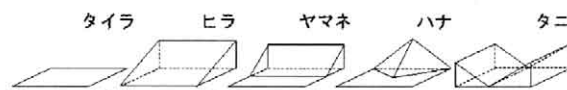


図 4-1 小字地形タイプ

表 4-1 小字地形タイプ

タイラ	平坦な土地であり、そのため多様な土地利用がなされている。
ヒラ	小字の領域内が斜面になっている地形タイプ。領域内が山地斜面の場合もこのタイプに入る。
ヤマネ	上記のタイラ型とヒラ型により構成されている地形タイプ。斜面部の土地利用率は低い。
ハナ	領域内が尾根の先端部と平地によって構成されるタイプ。サンプル数は少ないが、その土地利用には共通性がある。
タニ	尾根と尾根に挟まれた領域を持つタイプ。この地形タイプも、斜面部の土地利用率は低い。

表 4-2 小字の土地利用形態

住居域	集落内において宅地・母屋・付属建物などが集中し、1つの住居郡をなしている場合を指す。
生産域	田や畑といった農用地として利用されている区画。住居に付随している小さな耕作地は除く。
聖域	神社や寺、または墓地といった信仰と関わる施設を意味するが、道祖神や塞ノ神のような極めて点的な要素は除外する。
境界域	樹林地・緑地などの未耕作地、または人為的形跡が見られない土地である。そのため、共有林などは機能的には生産域に入るが、本節ではあくまで視覚による物理的な分類であるので、これを境界域とする。

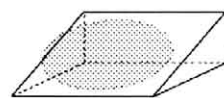


図 4-3 ヒラ

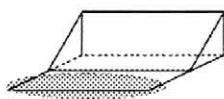


図 4-4 ヤマネ

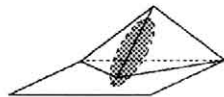


図 4-5 ハナ

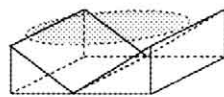


図 4-6 タニ

5. まとめと今後の課題

本研究では、集落の内部に存在する小字名と通称地名を用いることにより、以下のことが明らかになった。

- ①山麓集落の通称地名をもとに地名の語彙を 27 のカテゴリーに分類し、山麓集落の小字は、主に「地形」語彙に「位置」語彙が接続することによって場所が弁別され、湖岸集落の小字は、主に「場所区画」語彙に「位置」語彙や特徴的な環境を表す多様な語彙を結びつけることで、場所を弁別していた傾向を明らかにした。
- ②山麓集落における小字の地形形状を 5 タイプに類型化し、その命名の由来を通称地名や土地利用形態と比較することで、「タイラ」と「ヤマネ」においては小字領域内部の土地利用形態に依拠した命名がなされ、また「ヒラ」「ハナ」「タニ」においては各地形形状の特徴が命名の由来となっていた傾向を明らかにした。

今後は調査対象地を拡大することで、地形と地名との一般的な関係性を明らかにすることが最大の課題である。

補注

- (1)齊木崇人「農村集落の地形的立地条件と空間構成に関する研究」(学位論文)をもとに分類を行った。